SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.15
2018.11

海からの贈りもの、
さくら貝を拾う

Take Free

海からの贈りもの、さくら貝を拾う

―Lino Drops Kamakura　陸門浩行＆Lino―

文・中村 容

JR鎌倉駅。多くの観光客が東口改札を出て鶴岡八幡宮へと足を向ける。参道である若宮大路を二の鳥居からはじまる段葛（だんかずら）を選ばずに、みやげ物店や飲食店が軒を連ねる歩道を観光客に混じってゆっくり進む。朝夕と昼間の気温差が大きくなりはじめた初秋。10月末の水曜日、午後3時過ぎに彼の店の前で待ち合わせた。

彼の名は、陸門浩行（むつかどひろゆき）
店の名は、Lino Drops Kamakura

定休日で閉じられている「さくら貝アクセサリー」と書かれた看板を掲げる店。約束どおり、その前から電話をかける。3コールめで声が聞こえた。と同時に、店の横からスマートフォンを耳にあてながら陸門さんが姿を現した。華奢な体つき、ソフトな物腰、あたたかくとおる低音の声が静かに迎えてくれた。そこから案内されたのは「懇意にしてもらっている」という喫茶店「鎌倉おてらCafe」。駅の方へ少しだけ戻った若宮大路に面したビルの2階にある。待っていてくれたのは陸門さんのパートナーでLino　Drops Kamakuraの店主、さくら貝アクセサリーの製作者。

彼女の名は、Lino（りの）

作家ネームのLinoは店の名前にもなっている。大人の雰囲気の彼女にほどよく少女っぽさを添えているネックレスとピアスは、もちろん桜貝。
ふたりに派手なエピソードや高く振りかざす思いは見当たらない。桜貝を拾い、アクセサリーにしてみたら、多くの人が「素敵だ」と言ってくれる。ただ、それだけかもしれない。だが、湘南の風土は多くの人を引き寄せ、その中から

生まれる「小さな営み」が折り重なって文化がつくられている。広い砂浜で、薄くて小さな桜貝を探すように、陸門さんとLinoさんの営みに耳を傾けてみた。

愛知県知多出身の陸門さんと青森県八戸出身のLinoさんが鎌倉で暮らすようになったのは7年前。ふたりにとっては縁もゆかりもない、ただの憧れの街だった。
「演歌のような波しぶき、防波堤、岩場、大きな石がごろごろしている浜、大きくて色のない貝殻ばかり」と、故郷の海を振り返るLinoさん。「そんな海でも貝殻を拾うのは好きだった」と話しながら、エピソードをふたつ聞かせてくれた。

エピソード：その1
大きくて白や灰色の貝殻ばかりの八戸の海岸にも、夏の台風が通り過ぎるとキレイな色の貝殻が上がる。それを目当てに海岸へ出かけると、ねらいどおり「あった！」鮮やかな青紫色をした小さな貝を見つけた。ルリ貝だ。興奮して飛びつくように拾い上げた。だが、台風の素敵な置き土産にはうれしくないオマケもついていた。ルリ貝はその美しい色で人気があるとともに、実は猛毒を持つカツオノエボシというクラゲを食べる珍しい貝としても知られている。少女Linoは見事にカツオノエボシに刺された。

エピソード：その2
見せてもらっただけだったのか、誰かにお土産でもらったものだったのか、それはもう忘れてしまった。だが、その時の印象は今でも鮮明に残っている。小さくて透けそうなピンク色をした貝がかわいいガラス瓶に入っていた。桜貝をはじめて見た。「コレが貝殻？」いつも八戸の海岸で拾う大きくて色のない貝殻とは違いすぎた。「南国のもの」「幻に近いもの」としか思えない驚きは薄れることなく、憧れとして心の奥に静かに宿り続けることになった。

さくら貝アクセサリー製作担当：Lino
母親は自宅でオーダーメイドの洋服をつくる仕事をしていた。家には職業用のミシンが置かれ、使われなかった布の端キレや切られた糸はいくらでもあった。それらを縫い合わせて遊ぶうちに、「将来は服をつくる仕事をしたい」と自然に考えるようになっていた。ところが、高校受験を迎える頃になると現実的な選択をせまられた。将来は「事務職に就く」という現実を選択して普通高校の商業コースへ進んだ。簿記や数字は「弱かった」というLinoさんだが、実は中学生の頃から当時はまだまだ珍しかった家庭用のパソコンを自宅に持っていた。商業コースにはプログラミングの授業があり、絵を描くことが好きだったLinoさんは、Basicというコンピュータ言語を使って図柄を描くことに夢中になった。高校3年生の就職活動では、学校へ届く求人票から事務職を探した。その中に「これが事務職？」という気になる求人があった。図面をCAD（設計や製図を支援するシステムソフト）に取り込むという新しい仕事。簿記や数字が苦手でコンピュータ言語で図を描くのを楽しんでいたLinoさんは迷わずこの会社を選んだ。そして、この就職が「何かつくれば」と、さくら貝アクセサリーづくりを勧めてくれる陸門さんとの出会いにつながる選択となった。

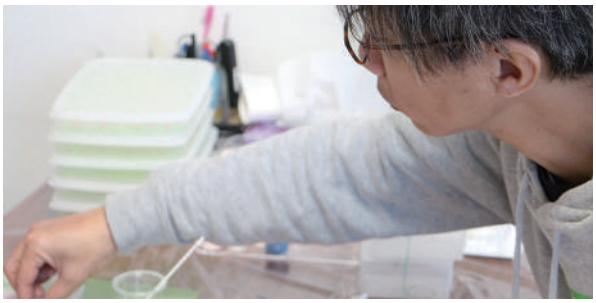
桜貝拾い、企画・渉外担当：陸門浩行
自宅に個人事務所を構える設計関係のエンジニアだった父と教育関係の仕事をしていた母の姿を見ながら子ども時代を過ごした。高校生の時、まだパソコンという言葉すら一般的ではなかった時代に8万円ほどもしたという家庭用のコンピューターを購入した。中学生の頃は家の手伝い、高校生の頃は学校の成績をあげることで「お小遣いを貯めて」自分で買った。「家のテレビにつなぐレジスターみたいなコンピューター」というから、相当のマニアかプロでなければ手を出さない高価な代物だったはず。この「レジスターみたいな」コンピューターを相手に高校生の陸門さんは「はじめから独学で」プログラミングを勉強した。エンジニアの血をひいている。
地元の教育大学へ進んだが、教育実習を機に「自分には冷めたところがあって」卒業を前にあっさりと教員からエンジニアへ進路の舵を切る。文系学生の前にもエンジニアの道は開けていた。コンピューター・エンジニア。入社後、先輩もやったことがない、誰もどうしていいかわからないまったく新しい仕事（プロッターからプリンターへのコンバージョン）を「やってみないか」と指名された。高校時代に独学でプログラミングを勉強した経験がある陸門さんは、未知な領域に手探りで挑む仕事にワクワクした。成果も出して、社内でも高く評価されるようになった。だが、順調にエンジニアの階段を上っていたはずが、気づくとマネージャーの階段が足元にあった。関わる人が増え、調整に費やす時間が膨らんだ。違和感。生真面目な性格が健康のバランスを乱しがちになっていた。
40歳の頃に陸門さんは東京へ転勤となり、担当した藤沢にある取引先でのプロジェクトでLinoさんと出会う。システムを開発する側とそのシステムを使ったアプリケーションに携わる立場だった。プロジェクトの仲間として議論する日々が続き、直接は関係のないアイディアなども率直に話す時間がたくさんあった。そんな中で、陸門さんとLimoさんはお互いの価値観や思考に共感できたのだろう。プロジェクトが目的を達して解散する頃には「また何かいっしょにやりたい」という思いを共有していた。
「プロジェクトは色々あってたいへんだったけれど、うまくいった」
「うん、うまくいったね」
一方がライフヒストリーを語る時間はお互いに口を挟まなかったふたり。この日はじめて声が重なった。

「鎌倉おてらCafe」は和風や仏教色を強調するわけでもなく、オシャレなインテリアで飾るわけでもない。気取らずにいられる居心地のよい時間が橙色の空間に漂っている。そんな雰囲気が陸門さんとLinoさんには似合う。背にしていたガラス張りの窓に目を向けると石灯籠に灯りがともった段葛がよく見えた。気がつくと陽が落ちる時間。この場所はふたりにとって「心のよりどころ」になっている。陸門さんは悩みがあるとここへ来て、マスターである浄土真宗浄榮寺の住職に心を開く。店外にある喫煙場所を使っていたのが言葉を交わすきっかけだった。「テレビみましたよ」と声をかけたのがマスター。街歩き番組で鎌倉がとりあげられたときにLino Drops Kamakuraが紹介されたのだ。それからのご縁。

Linoさんの湘南暮らしは、このプロジェクトへの参加とともにはじまった。「江ノ島の砂浜だったか、たまたま拾った」と振り返る。砂まじりの小さな薄い貝を手のひらにのせた。小学生の頃、ガラス瓶に入っているのを見て「南国のもの」「幻に近い」と感じた桜貝。「地元の人にとっては砂浜へ行けば落ちている普通の貝殻。でも、穴があいていても欠片（かけら）でも宝物」だった。海辺での「宝物」探し、桜貝の収集が趣味になっていた。しばらくして、Linoさんに「集めた貝はどうするの？何かつくったら？」と陸門さんが勧めた。藤沢でのプロジェクトで出会ってから2年後の2011年、Linoさんは会社を退職していた。その年に起きた東日本大震災の被害の大きさに衝撃を受けた。「いつ、どうなるかわからない。好きなことをして生きる道を求めてみたい」と思った。仕事探しのかたわらでふたりの新たなプロジェクトは趣味としてはじまった。だが、そこにはこだわりもあった。

陸門
「置物はつまらない、つくるなら日用で使えるものにする」
エンジニアだ。ユーザーを想像しながらシステムを開発してきた。

Lino
「キレイな貝はそれだけで価値がある、欠片（かけら）もどうにかする」
作家だ。子どもの頃、使われなかった布の端キレを縫い合わせて遊んでいた。

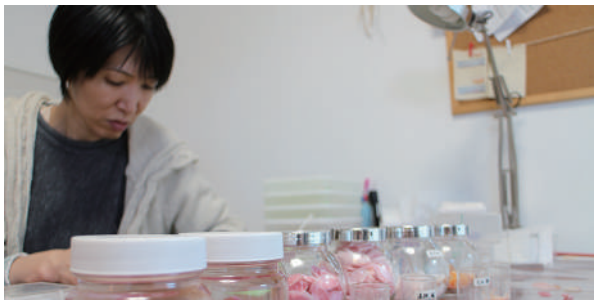


ふたりの「こだわり×できること」の解がアクセサリーだった。みやげ物屋に並ぶような二枚貝を染色したものでもない、工芸品のような高級な飾り物でもない、本物の桜貝で日用のアクセサリーをつくる。調べてみたが、あるようで無かった。情報もほとんど無いなかで試行錯誤を繰り返した。そう、未知な領域、新しい仕事に手探りで挑むことにワクワクするふたり。課題はふたつ。ひとつは、透けて見えるくらい薄い桜貝を日用使いしても割れたり潰れたりしないこと。もうひとつは、濡れているときに一番きれいな色を見せる桜貝をそのままの色でアクセサリーにすること。簡単ではなかった。あるようで無かった桜貝のハンドメイド・アクセサリー、その理由はこの難題にあるのかもしれない。最初に思いついたのはガラスで包むこと。だが、貝は熱に弱かった。ならば樹脂で。何種類もの樹脂を取り寄せ、何度も何度も試し、ようやく「これなら」というものを見つけた。海水に浸かっているときのようなキレイな色を保つために、貝殻の洗浄にも工夫が必要だった。

試作とネット通販でのリサーチ、改良をかさねて、ようやく作品といえるものを40個ほど揃えた。2013年5月、フリーマーケットに出店してみることにした。「鎌人いち場（かまんどいちば）」鎌倉海浜公園。「はじめは地元の人の反応が怖かった」というのは本音だろう。「桜貝をこんなふうにしてしまったのか」「こんなの桜貝じゃない」と言われるかもしれない。だが、それは杞憂に終わった。「えっ、コレ桜貝なの？」「こんなにキレイだっけ？」桜貝を見慣れた地元の人たちが驚いていた。喜んでくれた。そのころ、Linoさんは就職が決まり、陸門さんは体調を崩して療養中だった。外に出る機会が減っていた陸門さんを「気分転換に」とLinoさんが連れ出していた。この時から、Linoさんがつくって陸門さんが対面販売をするLino Drops Kamakuraのリアルがはじまった。「趣味」からはじまったこのプロジェクトが「仕事」へとシフトしはじめる。路地裏にある知り合いのカフェで、桜貝拾いとアクセサリーづくりのワークショップを開いた。同時に作品の展示販売もやらせてもらった。その時に偶然通りかかった別の店のオーナーから「いいものつくっている。うちの店の軒先で売ってみないか」と誘われた。場所は小町通り、鶴岡八幡宮に一番近いところ。観光客で賑わう一等地だった。Linoさんが会社勤めをしながら自宅で作品をつくり、陸門さんが週に3日だけ軒先店での販売を担当することになった。多くの人の目にとまる場所、雨や風の日

には出店されない限定感、他ではみられない本物志向のさくら貝アクセサリー、質は高くて手ごろな値段。口コミで評判がひろがった。作品づくりが追いつかない。遠方から訪ねてくれたのに残念な思いをさせてしまうこともある。「これからどうする？」ふたりの思いは、いつも一致していた。

2013年5月　コミュニティ・マーケットに初出店
「地元の人の反応が怖い・・・」
2013年11月　小町通りで週に3日だけ軒先に出店
「細々と続けていければ・・・」
2014年10月　大町にアトリエ兼店舗をオープン
「店舗があったほうが・・・」
2016年9月　若宮大路に店舗を移転
「ゆるくできて生活も維持できるように・・・」



「製作と販売はシステム化した」とLinoさん。「桜貝自体は一点もの、多くの人が欲しがる作品をシリーズ化して、効率よく揃えるものづくりのシステム」と陸門さん。「定番ものは怠らない」「作家として遊びの部分も忘れない」「新作は他のスタッフも含めて徹底的に吟味する」「店に出しても売れなければやめる」「数値化されたラインで厳格に判断する」「新作が定番になっていく喜び」エンジニアと作家が静かに交わすクールな言葉に、趣味を仕事にした覚悟が伝わる。こだわりを譲らないふたりの試行錯誤の積み重ねは、コーティング技術の「実用新案登録」と桜貝の欠片からつくるアクセサリーの「特許」に至った。だが、ふたりが編み出したこだわりの技術や効率的なシステムは目的ではない。

Lino Drops Kamakuraでは通常の製作に加え、持ち込みの桜貝での製作依頼も受けている。思い出の桜貝をアクセサリーにしていつまでも持っていたい、プレゼントしたい、という思いに応える。「大切なものをお預かりするので何倍も集中する」から作業効率は落ちる。それでも「誰かの幸せな気持ちのためになるのなら」という思いがある。丁寧にエピソードや想いを聴きながら、その人の仕草やファッションから漂う雰囲気にも心を向けて作品に投影する。スタッフ全員がそのプロセスを共有している。
そして、アクセサリーづくりを通して向けられる人への想いは桜貝ファンと結ばれ、Lino Drops Kamakuraへ返ってくる。由比ガ浜で桜貝がほとんど拾えない時期があった。原因はわからない。「いつか、さくら貝アクセサリーづくりが続けられなくなるかも」と最悪の状況が頭をよぎる中、SNSで「桜貝が少なくなった」とつぶやいた。軽い近況報告のつもりだったが、数日たつと「私が集めたものを使って」と桜貝が届けられた。1件や2件ではなかった。思わぬ反応に驚き、戸惑った。そして、うれしかった。その時に届けられた桜貝は特別なアクセサリーになっている。災害などの復興支援チャリティーがあると、ふたりはそのアクセサリーの売り上げを寄付している。結ばれた人への想いの循環。

桜貝を拾うのが陸門さんの仕事。桜貝でアクセサリーをつくるのがLinoさんの仕事。仕事をとおして海とつながるふたりが思い描き、願うことがある。夏以外の季節にも、マリンスポーツをやらない人にも、多くの人に鎌倉の海に来て楽しんでほしい。桜貝を拾いに来ることが鎌倉観光の定番になったらうれしい。そのためにも、いつまでも桜貝が拾える鎌倉の海であってほしい。

Lino
ハワイ語で 光る 輝く 結ぶ　（彼女の本名はのりこ）

Drops
しずく（波のしずくで包み込む）
キャンディー（桜貝を樹脂で包むとドロップみたい）

Kamakura　いつまでも桜貝が拾える海がある街

海の底からキレイにしよう
江の島 海底清掃プロジェクト

2018年10月6日(土) at 10:00-12:00　江の島湘南港

海底清掃に参加された皆様おつかれさまでした!!10月とは思えないほどの暑〜いなかでの作業でしたが、みんなで力を合わせて海底からのごみの引き揚げ作業。結果として10時からスタートして11時30分までのわずか90分でなんと400kg近くのごみを回収することができました。

海をつくる会の坂本代表のお話によると、ごみの内容は釣りの重りや擬似餌、事務所の鉄骨や看板等様々。「なんでこんなものが!」と思うような重いものでも高潮で浮力がつくと簡単に流れるんだそうです。今日は視界が悪く4m先は手探り状態。そんな状態でもこの成果を出せるのは、海をつくる会の皆さんが目をつぶってもロープワークができるまで修行を積んでいるからだそうです。

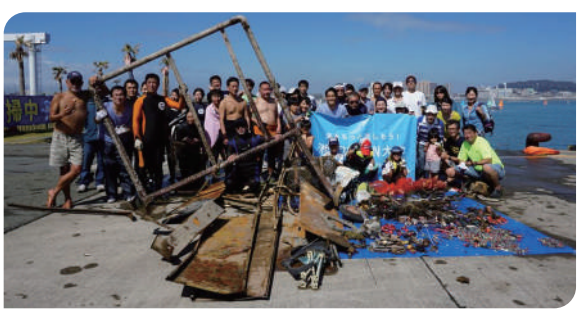
ごみはやっぱりプラゴミが多いそう。洗濯ばさみは紫外線に浴びると劣化して砕けてマイクロプラスチックに。ゴミは2mmまでは回収出来るが大きいうちに回収したいとのこと。

また、ペットボトルは可塑剤の量で硬軟を調整しており、使い回すほど可塑剤が溶けるので使用は1回限りにした方が良いとのアドバイスをいただきました。

河川から流れたごみはそのまま世界中の海に流れていくそうです。ハワイでの海底清掃では、釜石にある国道の鉄柱が6400kmの海底を転がって流れ着いていたそうです。

ダイバーの皆さん、ボランティアで参加してくれたみなさん、本当にありがとうございました!

これからも海を大切に、身近なところからみんなで取り組んでいきましょう!　（文・片山 久美）



色ガラスを並べて楽しく作ろう
フュージングガラス体験

2018年10月13日(土) at 10:00-12:30
ガラス工房「JONAS GLASS VISION（ヨーナスガラスビジョン）」

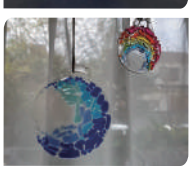
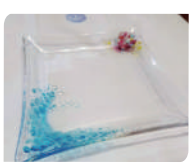
満員御礼!七里ヶ浜にあるガラス工房『ヨーナスガラスビジョン』さんにて、フュージングガラス体験をしました。ヨーナスさんと奥様が先生です。

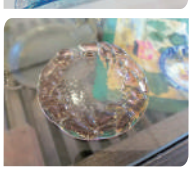
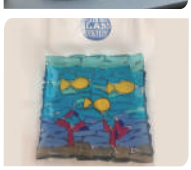
好みの板ガラスを選んだら、後は色ガラスのチップを配置していきます。工具を使ってガラスを砕いたり、大人も子供も夢中になって作品に向き合ってました!

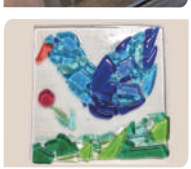
出来上がりは後日です。どんな風に仕上がるのかな〜受け取りが楽しみです。

皆さまご参加いただきありがとうございました。今度は吹きガラス体験もいいですね☆　（文・関水裕子）

皆さんの完成品です!どれも素晴らしい出来上がり。大胆だったり、繊細だったり、個性が出ます。可愛いですね〜!また企画したいです♪



海底2万マイルの大冒険に出よう!
くじら号の地球だいぼうけん（深海絵本読み聞かせライブ　後援：逗子市）

2018年10月27日(土) at 14:00-15:30　古民家「葡萄屋」

10月27日(土)「NPO法人チームくじら号　http://www.kujirago.org/」さんに、ご協力いただき「くじら号の地球だいぼうけん（深海絵本読み聞かせライブ）」を開催しました。ご参加いただいた皆さま、ありがとうございました!

加藤博士と「くじら号」で深海の不思議な世界を旅した後は、「ウミホタル」の不思議な発光を間近で観ました。長井博士がたくさんの「ウミホタル」を実験ビンに入れてくれたので、とても明るい光を観察しました。その後、豊福博士の「知らないことを知る」サイエンストークへと続きました。

子ども達は、有孔虫を顕微鏡で観たり、くじら号の物語にも登場する深海生物の標本を観たりと、科学者と一緒に本物に触れ、わくわく楽しい時間を過ごしました。また「くじら号」と一緒に深海の不思議な世界へ旅立ちましょう!!

♪special thanks
会場の古民家「葡萄屋」さんには、設営にもご支援いただき、居心地のよい場所でライブ&サイエンストークを楽しむことができました。ご協力いただいたボランティアの皆さま、ありがとうございました。　（文・ニシオ エイコ）

地面とつながるアーシング　歩くマインドフルネス瞑想vol.2

2018年10月28日(日) at 9:00-10:30　　由比ガ浜

「歩くマインドフルネス瞑想」の第2回を開催しました。今回の講師は、「Sugata鎌倉のインストラクター」新宮由希子先生。集合時間では少し肌寒いと感じましたが、いざビーチに降りて歩きはじめると日差しがでてきて、気持ちのいい陽気になりました。足の裏や手のひらで感じる砂の感触、上を見上げたときの広い空の景色、風や波を五感で感じながら、頭の中にある色々なものを客観的に受け流していったり、体が感じる気持ちよさに素直に寄り添ったり、感じたことを言葉にしてみたり。秋の朝の由比ヶ浜で各々が各々の方法で体と心を気持ちよくバランスするゆったりとした時間を共有できました。毎月やってもいいのではという感想もありましたが、1年を通して季節の移り変わりを感じるのもいいかもしれませんね。新宮さん、参加してくださったみなさま、スタッフのみなさま、素敵な時間をありがとうございました。　（文・大塚靖雄）

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています

AD

藤沢スマイル歯科医院

いたくない！小児歯科から歯周病治療。入れ歯治療まで

スタッフ募集　笑顔あふれる新しい職場

【募集要項】若干名
【交通費】全額支給（車通勤OK!）
【待遇充実!食事代補助】
【設立】2008年
【科】一般、小児、矯正、審美、予防、ホワイトニング、歯周病治療、顎関節治療
【休】完全週休2日制（水、祝、他1日）※祝日週の振替診療なし
【就業時間】（月、火、木、金）10：00〜20：00
（土、日）10：00〜18：00　各日休憩90分
【他】夏季5日　冬季5日

トレアージュ白旗2F医療モール（小田急江ノ島線　藤沢本町から徒歩5分）
無料大型駐車場あり
HP　http://www.fujisawa-smileshika.jp

誰でも参加できる"海の学び場"『湘南VISION大学』授業

海のある暮らしをもっと楽しもう!

海の見える農園 de みかん狩り

2018年12月8日（土）at 10:00-12:00　会場：UMEMARU FARM

小田原の海が見える最高のロケーションの農場で、みかん狩りを体験しながら、農業の六次産業化について学ぶ企画です。
プレゼンターは「株式会社UMEMARU Inc.」代表の守屋佑一さん。
あの、神奈川県が開発したオレンジ・湘南ゴールドの果汁を使用したエナジードリンク「SHONAN GOLD ENERGY」の生みの親です!
守屋さんの農園でのみかん収穫体験は大人気!今年も既に申し込み多数だそうです。みなさん、年末年始にこたつで食べる美味しいみかんをゲットしましょう。お一人様、お子様連れも大歓迎!ぜひご参加ください(^^)
【参加費用】お一人1,000円（小学生未満は無料、おみやげ用みかん1kg込）

授業の詳細・申し込み・お問い合わせ：
FB：https://www.facebook.com/shonanvision/　　HP：http://shonan-vision.org/
申込は、Facebookイベントページの参加ボタンを押すか、info@shonan-vision.orgまでご連絡ください。
延期又は中止の場合は、Facebookイベントページ上又は湘南ビジョン研究所HPでご連絡します。

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.15
2018.11

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：森休八郎
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：中村 容　片山久美　関水裕子
大塚靖雄　ニシオエイコ
COVER PHOTO：中村 容

http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org

SHONAN VISION vol.15 | 2018年11月号　2018年11月25日 発行　発行：NPO法人湘南ビジョン研究所　〒251−0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3−9−29　shonan-vision.org